



ご挨拶

服部 佳功

日本顎口腔機能学会 会長

(東北大学大学院歯学研究科副研究科長・加齢歯科学分野教授)

1993年6月に発足した本学会は、昨年、設立30周年を迎えました。加えて前身の研究会が11年の歴史を重ねております。40年を超える歳月が育んだ本会の伝統は、他に類例のない独自の様式を齎しました。その伝統とは、こと顎口腔機能研究に関する限り長幼の序にも朋友の信にも忖度せず自由闊達に意見を交わす姿勢を尊ぶことであり、学会を会員間の研究コミュニティ形成や次世代研究者育成の場と看做すことです。学術大会において各口演演題に宛てる時間の長さ、講師と参加者が入り乱れて昼夜を分かつた活動を行う顎口腔機能セミナー、再開された学会賞・奨励賞の選考基準などは、いずれも本会の伝統が会独自の活動様式のかたちで発露したものと申せましょう。

本会の目的は会則第2条に「本会は顎口腔系の諸機能に関する基礎ならびに臨床の真理探究し、その進歩発展を図ることを目的とする」と記されるとおりですが、やや抽象的に過ぎて明確とはいえません。前身の研究会の記録を読み返しますと、下顎運動やそれに伴う筋電図記録に係る技術は長足の進歩を遂げつつあるが、未だ臨床診断に十分に活用できる状態ではない、臨床検査用パラメータや表示法を確立し、あるいは臨床用の分析機器の開発を行うことで、臨床診断法の確立に寄与することが会の目的ないし使命である旨の記載が見つかります。当初年5回もの研究会を催した活性は、会の目的や使命が往時の会員個々に理解され、支持され、会員間で共有されたことに由来すると思えます。

上述の使命をもう少し抽象化し、あるいは適応の範疇を拡大し、顎口腔機能の記録・分析・評価における実用的価値の追求と言い換えるならば、それは今なお本会の使命の適切な表現であると言って差し支えありません。今日、本学会には基礎と臨床の広範な領域にまたがる歯学研究者に加えて、工学者や医学者をはじめとする多様な学問領域の研究者が参画して頂いております。学際的環境で行われる旺盛な意見交換がこの領域の研究に情熱を傾ける若手会員の成長を促し、出口の明確な実学としての顎口腔機能研究が数多く生み出されております。本会の伝統がこれからも永く受け継がれ、会の研究成果がより多く社会実装されることで、顎口腔機能研究の拠点として一層確かな地歩を固められますよう、会員の皆様のご協力のご支援をお願い申し上げる次第です。